Research Monograph Series

即座の生成論
——即・座・位・現実接地による存在生成——

The Generative Ontology of Sokuza: Situated Actualization, Reality Grounding, and the Generation of Position

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Generative Ontology of Sokuza:
Situated Actualization, Reality Grounding, and the Generation of Position

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本稿は、通常「すぐその場で」を意味する「即座」を、速度の概念から、身体、場所、型、位、応答および現実接地の存在論へと再構成する。「即」は、異なる二項を同一化する論理ではなく、差異を保持したまま異質な位相を生成的に接続する構造である。「座」は、型によって編成され、占有者に還元されない位を保持する構造化された空位である。

したがって即座とは、身体または行為が座に接することで「即」という生成的接続構造が具体的に成立し、現実からの抵抗を受けながら位が生成され、その接触によって座自体も変形する出来事である。

即座性は時間の短縮ではない。それは過去の型、現在の接触および未来の可能性が一つの応答に凝縮される、時間的に密度の高い現前である。本稿は、即時化された現代社会が必ずしも即座性を持たないことを示し、芸術を、必然性を偶然性へ変換する即座の条件設計として位置づける。

キーワード

即座、即、座、位、現実接地、身体、インターフェイス、偶然性、生活即芸術、AI

目次

Contents

方法上の注記 1

1 即座は速度ではない 1

2 即の生成論的意味 1

3 座との統合 2

4 即時・即座・即興・即位 2

5 即座の時間構造 2

6 現実接地と力 3

7 人間以前性・自己以前性・自己証明 3

8 生活即芸術と芸術実践 4

9 即なき座・座なき即 4

10 AIと即座性 4

11 即座の倫理 5

12 即座の生成論の基本命題 5

結論 6

参考文献 7

方法論的声明 8

方法上の注記

辞書的な「即座」は「すぐその場」を意味する（『日本国語大辞典』「即座」）。本稿はこの日常語の歴史的意味を否定せず、その「すぐ」と「その場」の結合を生成学的に再解釈する。

また、漢字「即」の字義から哲学体系が直接導出されると主張するものではない。以下の議論は語源論ではなく、既存の生成学における「即」と、本稿で精密化した「座」とを統合する哲学的構成である。

1　即座は速度ではない

「即座」は一般に、ある出来事の直後に、その場で応答することを意味する。確認できる古い用例には『正法眼蔵』「無情説法」がある（「即座」）。

しかし「直後」と「その場」は同じではない。即時性が主として時間間隔の短さを示すのに対し、即座性は、行為者が具体的な場所、身体、他者および結果から離脱できないことを示す。

現代の通信、金融、SNS、生成AIは応答時間を著しく短縮した。しかし、応答が身体的結果、場所の抵抗、他者の反応および責任へ接続されなければ、それは即時的であっても即座的ではない。したがって本稿の第一命題は次のようになる。

即座性とは応答の速さではなく、応答が現実の関係から離脱できないことである。

2　即の生成論的意味

「即」には、地位や位置につくこと、すぐに行うこと、「すなわち」として二項を結ぶことなどの字義がある（漢字ペディア「即」）。

生成学における即は、二項の同一性を意味しない。「生活即芸術」は、生活と芸術が最初から同じであるという命題ではない。生活が、身体、自然、場所、他者、時間および応答を接続するインターフェイスとして作動するとき、芸術的な存在生成が現実化するという命題である（田中 2026d）。

即とは、差異を消去せずに異質な位相を接続し、その差異を保持したまま新たな関係生成を可能にする接続構造である。したがって即は静的な等号ではなく、位相変換が生起するための生成的インターフェイスである。

3　座との統合

前論で、座は構造化された空位として定義された。座は、型、参与境界、複数の位、反復、応答および継承可能性から構成される。

この座に即が加わるとき、即は座の外部から付加される段階ではない。即は、座に潜在する関係可能性が現実の接続構造として成立する位相である。とりわけ、その接続を通じて、座に準備された位が具体的な関係として現実化される。

即座とは、身体または行為が構造化された空位に接し、現実の抵抗を受けながら位を生成し、その接触によって座自体を変形する出来事である。

ここでは、完成した主体が完成した座へ入るのではない。主体は、座への接触と応答を通じて、特定の位を担う存在として生成される。同時に、座も参加者の接触以前と同一ではなくなる。

4　即時・即座・即興・即位

「即」を含む語は、それぞれ異なる生成の側面を示す。

即時は、出来事間の時間差が最小化されることを示す。即興は、あらかじめすべてを決定せず、既存の型と現在の応答から形を生成することを示す。即位は、人物が継承された位につくことを示す（「即位」）。

即座はこれらを単純に総合する語ではないが、時間、現場、型および位の接点を示す。即興が形の生成を強調し、即位が位の継承を強調するのに対して、即座は身体がその場の関係へ入り、応答の結果を引き受ける出来事を強調する。

5　即座の時間構造

即座は無時間的な瞬間ではない。そこには三つの時間が重なる。

過去は、型、技法、記憶、制度および身体習慣として現在へ沈殿している。現在は、身体が他者、物質、自然または制度と接触する応答の局面である。未来は、言葉、予期、構想および未決定の可能性として現在を方向づける。

したがって即座とは、過去を切断した反射ではなく、過去の型を現在の抵抗へ曝し、未来の接続可能性を生成する時間的凝縮である。

速度が増しても、この三重構造が失われれば即座性は低下する。反対に、応答までに長い沈黙や熟考を要しても、身体が現実との関係を引き受けているなら、その応答は生成学的に即座的でありうる。

6　現実接地と力

『力の生成論』では、現実接地は、言語的に構成された未来が身体行為を通じて自己外部の現実へ接触し、抵抗、遅延、変形または不一致を受け取る過程として定義された（田中 2026e）。

言葉が未来を構成し、その意味が方向を生み、方向が身体的態度と行為へ移行する。身体が現実に接触すると、言葉の予測と現実の間にずれが生じる。このずれが偶然性を生成し、既存の必然的構造を変形する力となる。

即座は、この現実接地が出来事として生起する位相である。生成学的な意味での即座は、何らかの現実的抵抗または差異への応答を必要とする。抵抗が排除され、記号が記号だけによって承認されるとき、言葉はデリバティブ空間を循環し、整合性や人気が現実性と誤認される。

力は主体が所有する量ではない。異質な位相のあいだに成立した接続構造が、現実の位相変換として現象する生成的運動である。

7　人間以前性・自己以前性・自己証明

即座において接触するのは、社会的に完成した自己と中立的環境ではない。

身体、重力、呼吸、季節、成長、腐敗、素材および時間という人間以前性と、まだ社会的自己へ固定されていない感覚、方向、身振り、判断および創造可能性という自己以前性が接触する（田中 2026c）。

自己以前性は、それ自体を直接確認できない。樹木、場所、他者、作品または制度からの応答を受けた後に、「自分が何へ向かっていたか」が事後的に現れる。この応答による顕在化が自己証明である。

したがって即座では、自己が先に存在して応答するのではない。応答を通じて、応答した自己が生成される。

8　生活即芸術と芸術実践

生活即芸術とは、生活を芸術作品のように装飾することではない。生活そのものが、人間以前性と自己以前性を接続し、存在、自己および自己証明を反復的に生成するインターフェイスとして作動することである（田中 2026d）。

グラフィティでは、身体の運動が壁面、都市規則、通行者、天候および消去可能性に接触する。描線は、事前の意図の再現ではなく、その場の抵抗によって生成される即座的な形である。

盆栽では、切る、曲げる、水を与えるという行為が、樹木の成長と季節的応答へ接続される。樹木の反応が遅れて現れる場合でも、その実践は長い時間幅を持つ即座である。

Web Installationでは、情報の即時表示だけでは即座にならない。画面上の言語がQRコード、端末、身体移動、物理的場所、通信障害および鑑賞者の行為へ接続されるとき、デジタル情報は現実接地を獲得する。

芸術とは、完成物の製造ではなく、閉じた必然性の内部に新しい接続可能性が生まれる即座の条件を設計する実践である。

9　即なき座・座なき即

即なき座とは、型と位は存在するが、新たな接触と応答によって変形されない制度である。そこでは座は儀礼化し、位は所有化され、反復は自己保存となる。

座なき即とは、応答は高速だが、その応答を支える場所、身体、型、責任および継承構造が存在しない状態である。SNS上の反射的評価、アルゴリズムによる自動順位づけ、投機的な記号循環などがその典型となりうる。

即座は両者の中間ではない。即と座が互いを変形する結合である。

座は生成的接続が持続・反復されうる構造を保持し、即はその構造が具体的な関係として成立する接続条件を形成する。

10　AIと即座性

AIは大量の記号関係を処理し、未来の言語的可能性を提示できる。しかしAIの出力が、それだけで身体的応答、現実の抵抗または結果責任を引き受けるわけではない。

したがってAIは即座の補助的インターフェイスにはなりうるが、身体的応答を完全に代替することはできない。AIが生成的な即座へ参加するためには、少なくとも次の条件が必要である。

1. 出力が具体的な身体、場所または実践へ接続されること。
2. 現実からの反証、失敗、遅延および抵抗を受け取ること。
3. 決定者と結果責任の所在が追跡可能であること。
4. 出力によって座の位と規則がどう変化したかを再検討できること。

この条件を欠くAI的即時性は、座なき即となる危険がある。

11　即座の倫理

即座の倫理は「素早く正しく判断する倫理」ではない。それは、接触によって生じた関係から離脱せず、応答の結果を引き受ける倫理である。

その評価基準は、誰が座へ参加できるか、誰が位を配分するか、誰の身体が危険を負うか、どの応答が無視されるか、生成された関係が修正可能か、という問いにある。

即座的行為は、反射的である必要はない。しかし、それは現実からの応答に対して答えうるものでなければならない。即座性の核心は、即時性ではなく応答可能性、すなわち責任である。

12　即座の生成論の基本命題

1. 即は同一化ではなく、差異を保持したまま異質な位相を接続する生成的構造である。
2. 座は、型と位を保持する構造化された空位である。
3. 即座は、座に潜在する関係可能性が「即」という生成的接続構造を通じて現実化され、その接触によって座自体も変形する出来事である。
4. 即座において、主体と位は接触以前に完成していない。
5. 即座は過去の型、現在の抵抗、未来の可能性を凝縮する。

6. 現実からの抵抗が偶然性と力を生成する。
7. 即時性は即座性の必要条件でも十分条件でもない。
8. 芸術は、必然性が偶然性へ位相変換する即座の条件を設計する。
9. 即座は座を反復するだけでなく、その型と位を再帰的に変形する。
10. 即座の倫理的条件は、身体性、応答可能性および結果責任である。

結論

即座は「すぐに」という速度表現を越えて、存在生成の中核概念となる。座が構造化された空位であるなら、即はその空位において異質な位相を生成的に接続し、位の現実化を可能にする接続構造である。位はその接触の一時的な納まりであり、応答は納まりを再び開く。

現代社会の問題は、即時化したことそのものではない。即時化が身体、場所、他者、自然、責任および現実からの抵抗を切断し、座なき即を増殖させていることにある。

即座を回復するとは、速度を落とすことだけではない。言葉を身体へ、身体を現実へ、現実の抵抗を新たな関係へ接続することである。そこに、必然性を偶然性へ変換し、存在を再び生成可能にする芸術の働きがある。

参考文献

* Dewey, John. 1934. Art as Experience. Minton, Balch.
* Fischer-Lichte, Erika. 2008. The Transformative Power of Performance. Routledge.
* Rosa, Hartmut. 2013. Social Acceleration. Columbia University Press.
* Suchman, Lucy. 2007. Human–Machine Reconfigurations. Cambridge University Press.
* Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026a. Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026b. The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026c. Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026d. The Ontology of Life as Art. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026e. A Generative Theory of Force. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026f. The Generative Ontology of Za: Structured Vacancy, Kata, Position, and Namelessness in Generative Studies. Research Monograph Series, Version 1.0.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。